



島之内教会だより

〒542-0083

大阪市中央区東心斎橋1-6-7

&FAX 06-6271-8202

牧師 木戸 定

郵便振込：大阪 00930-1-44418

第 25 号 2014年6月発行

完全な喜び

牧師 木戸 定

島之内教会では、前任者大門義和牧師の時代から毎週の礼拝において、「平和の祈り」を祈っています。会堂の入り口にも掲げられており、よく知られた祈りですが、この祈りを祈りながら、わたしは聖フランシスコ（1181頃～1226年）とその弟子レオーネとの会話を思い出出すことがあります。

J.J. ヨルゲンセン著「アシジの聖フランシスコ」（平凡社 水野藤夫訳）にその全文が記されていますが、紙面の都合上一部分しかご紹介することができません。

フランシスコは、ある冬の一日、兄弟レオーネとペルーシアからボルチウクラへ旅をしました。その道中、二人の間で、完全な喜びについてのやりとりが行われます。たとえば、フランシスコはレオーネにこう言います。

「おお、兄弟レオーネよ、わたしたち兄弟が話し方をわきまえて、不信の者が全部キリスト教徒に改宗しても、完全な喜びはそこにはないことを、よく銘記しなさい。」

私たちは教勢があるごことを願い、礼拝出席者が増え、信仰を告白して洗礼を受け、教会員となったださる方が増えれば嬉しいです。ましてや不信の者がすべてキリスト教徒になれば、それほど大きな喜びはないと考えます。しかし、フランシスコは、そこに完全な喜びはない、と言うのです。

では、どこに完全な喜びはあるのでしょうか。「わたしたちはこうしてボルチウクラへ向かっているが、雨にびしょぬれになり、寒さにかじかみ、道の泥にまみれ、飢えに苦しんでい、修道院の門をたたくと、門番が出てきて、腹を立て『だれだ』という。こちらは『二人の修道士です』と答える。するとこうだ。『うそをつけ、追いはぎだろう。うろつき回っては人のものをかすめ、貧者からほどこしをひったくる奴

らだ。さっさと行っちまえ！』門番はそういつて門もあけず、空腹のわたしたちを外の雪と水と寒さの中に、ほったらかしておく。日が暮れる。そんな時に、わたしたちはそんな悪口や悪意や取扱いに耐え、がまんして、怒ったり不平をなしたりせずに、この門番はわたしたちのことを見通していて、彼にそういわせたのは神である、とへりくだって愛情をもって思う時おお、兄弟レオーネよ、いいかね、これこそ完全な喜びです。」

どうして、それが完全な喜びなのか分かりません。フランシスコは、その答えをこんなふうに語っています。「だから、兄弟レオーネよ、・・・自分自身に勝ち、キリストのためにあらゆる苦しみ、不正、恥、不快に耐えることです。・・・それはわたしたちのものではなく、神からのものです。」つまり、どんな厳しい試練にも忍耐強く耐え、キリストの苦難を思い、キリストへの愛のために苦しむことができることは、神さまからの賜物であるということであり、それをいただくことができること、これこそ完全な喜びであるということでしょう。

キリスト者として長年生きてこられた人も、そうでない人も、それぞれに信仰者ゆえに耐え忍ばなければならなかった試練は誰にもあるはずで、そして、これからもそんな試練に満ち溢れた茨の道を歩いてゆかなければならないでしょう。できることなら試練はないほうが良いと思ってしまいます。しかし、本当はそうではないのです。厳しい試練に遭遇するからこそ、そこで賜ることのできる神さまの大きな恵み、完全な喜びがあるのです。

平和の祈りも自分の力では生きることできません。それができるとしたら、それは神さまの恵みです。

神さまの恵みの御手に導かれて、主の御後にしたがってゆきましょう。

「島之内教会と私」

八尾喜光恵

私は1952年12月21日にフリーメソジスト岸ノ里教会にて畑野基牧師から洗礼を受けました。動機は眞に不謹慎で、高校のクラブ関係の書類を作成するために度々牧師の事務所をお借りしておりましたので、申し訳けに洗礼でも受けようかと思いました。

その後、高校2年生の終りから高校3年生の初めにかけて肺結核のための静養中に八尾繁（後の夫となる人）が所属していた島之内教会に、私の許可なしで私を島之内教会に転会しておりました。

1961年に西原勇牧師司式にて八尾繁と結婚し、1963年に長男、1966年に長女を出産し、育児に専念しておりました。

1987年、八尾繁が胃癌のため召天しましたが、夫の療養中に西原勇牧師夫人の恵さんから、「神様はその人に一番良いと思うことをして下さる」と云うお言葉をいただきました。私は苦しい時でもそのお言葉が励みになりました。夫が50歳で召天し、その後、私には大変苦しい時期もありましたが、いつもそのお言葉を忘れずに頑張ってきました。

私は60歳までは、いつも、「神様、助けて下さい」とお願いすることばかりでしたが、今では何事にも、「神様、ありがとうございます」と云えるようになりました。本当に感謝です。もしあの時に夫が島之内教会に私を転会させてくれないければ、きっと信仰から離れてしまっていたと思います。

今、私が島之内教会にあるのは、神様が夫を通じてご計画くださったのだと思うと本当に感謝です。神様、本当にありがとうございます。



「私の寝る前の賛美歌」

川島 信一

私は、以前から寝つきが悪く、病院で軽い（と自分では思っています）神経安定剤をもらって寝る前の飲みますが、なかなか寝付けません。困ったのは、寝る前のお祈りをすると緊張するためか、眠れなくなってしまうことです。

そこで、数年前から、お祈りを短くして布団にもぐり込んで賛美歌を口ずさむことにすると、何とか寝れるようなので、今も やっています。

今、口ずさんでいる賛美歌は以下のものです。

- 39 1~5 1、日くれて四方はくらく わがたまはいとさびし よるべなき身のたよる 主よともに宿りませ。

この賛美歌は、私が名古屋の居る自時分（1946~51年）、父が事故でなくなり、家族が大阪に帰り、私一人会社の寮に居た頃、夜の焼け跡の中の道を、この賛美歌（たしか1番だけだったと思います）を歌いながら、金城教会の聖書研究・祈祷会に通いました。私の会生活の原点のようなものです。

しかし、寝る前に口ずさんでいるうちに、この賛美歌は、人が生きて行くすべての時に、「主よ共に宿りませ」と祈って歌うものだと思付きました。以後、5番まで歌うことにしています。

- 80 ~ 1 み言葉をください、降りそぐ雨のように、恵みの主よ 飢えと渴きに、くるしみうめき、やみ路さまよう、いのちのために。

この賛美歌は、「み言葉をください」との最初の言葉にひかれて歌っています。みことばをうけているようには思えない私の願望だと思いません。

- 95 1~2 わが心は あまつ神をとうとみ、わがたましい、すくいぬしを はめたたえて よるこぶ、 数に足らぬ、はしためをも 見すてず よろず代まで さきわいつつ、めぐみたもう うれしさ。

この賛美歌は、2番の「数に足らぬ□□□□□□□□□□見すてず」の歌詞にすがって選びました。1番は、私のような弱い信仰ではとてもという思い

ですが、これをとばしてはいけなくと考へ歌っています。

-405 1~2 かみともにはいて、
ゆく道をまもり あめの御糧もて、ちからをあ
たえませ（くりかえし）また会う日まで、また
会う日まで、かみのまもり、汝が身を離れざ
れ 荒野をゆくところも、あらし吹くときも、ゆ
くてをしめして、たえずみちびきませ。

この賛美歌は、告別式などでよく歌われます
が、あるとき、ふと、これはお別れの賛美歌で
はない、人が、一日一日を生きていく中で、歌
うものだと気がきました。

-202 友よ、また会う日まで、 シャ
ロン シャロン めぐみの主まもりたもう シャ
ロン シャロン

短い賛美歌ですが、コーヒーハウス「1
階のトイレの前のホワイトハウスで開かれてい
た」の終わりにみんなで歌たものです。何故か
私の心に残っています。

私は、寝る前の賛美歌の終わりに、「
めぐみの主まもりたもう ころ安すく」と、読
み替えてずさみ、眠りにはいります。

この形になるまでに、10以上の
賛美歌を差し替えて口ずさんで
きました。始めから続いているの
は、-39と-202だけです。
1番から終わりまでうたったのは、
39とあと一つだけだったと思い
ます。しかし、時間が長くなる
ので、寝るのが遅くなったときは
途中をカットしたりします。

賛美歌は作られた信仰の先輩の心のこもっ
ているもの。つまみ食いはいけないと思うので
す。私はどうも、その時々、自分にとってこ
ころよい賛美歌のしかも都合のよい箇所を選ん
できたのではないかと考へてしまいます。

「海の魚、空の鳥、野の花」

黒田 正純

宮沢賢治の詩集「春と修羅」のいくつかの詩
に、林光さんが作曲した合唱音楽を練習してい
る。

その中の「グランド電柱」は、花巻グランド電
柱の 百の碍子に集まる雀

掠奪のために田にはいり
うるうるうると飛び~

素敵なフレーズが、まだ続くが、詩を読み、歌
うことを通して宮沢賢治の世界を味わっている。

私は、竹田城のふもとの田舎の町で育ったの
で、子供の頃、グランド電柱の碍子に集まる雀
は、見慣れた風景であった。鳶がピッコロの鳴
き声を挙げて、高い空を旋回した。

大阪、河南に住んで32年、最初の頃、庭先に
沢山の雀が来て、餌をついばんでいた。10年
以上前から、ついぞそんな雀の姿も見なくな
った。もちろん鳶の旋回も空に見えない。

人間の生活の影響もあるのだろう。美食礼賛
で、海の魚を獲り尽くし、その
ことを罪にも感じなくなった。この地上の最大
の掠奪者は、たぶん人間なのだ
と思っている。

人間は、人間本位に生きている。「野の花が
どのように育つのか、注意して見なさい。働き
もせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。

栄華を極めたソロモンでさえ、
この花の一つほどにも着飾っ
ていなかった。」

信仰を通してこの言葉を与え
られたのは幸いであった。世
の動きにならい、おいしい食
を求めたし、華やかな衣装に
必要以上、心奪われることも
確かにあった。マタイ福音書

の主イエスの言葉に、心の重荷を少し軽くさせ
て戴いている。現実を生きている私自身、時と
して、底の見えない欲望に心が囚えられるのだ。
やはり人間は、人間本位で目が曇っている。ガ
リラヤの春の野、空に鳥が舞い、静かに咲き出
で始めた花々に囲まれて、語られたのであろう、
主の言葉を、老いに向かう私は、大切な宝とし
て心に受けて、日々の苦しみ、喜びに出会いた
いと思っている。

「新緑の季節の新たなスタート」

河野まり子

大阪から車を運転して奈良へと阪神高速を走っていると、車の真正面に生駒山が目に入ります。2月頃まではその山並みは枯れた薄茶色だったのに、最近日はを追うごとに薄い緑へと変化して美しい色合いを呈してきます。もう少し季節が進むと緑の深さが増して目を楽しませてくれることでしょう。毎年、木々が新しい芽を吹き出すこの季節には自然界の生命力を感じ、新しい命が創成されていることを身をもって感じます。

島之内教会も新しい年度を迎え、今年より新たに木戸先生をお迎えしての教会生活がスタートしました。私たちの信仰生活がより豊かになるように願ってやみません。

今日は木戸先生が就任されて初めて「聖書を学ぶ会」に参加しました。

詩篇4章2節～8節まで。第1節に聖歌隊の指揮者によって琴にあわせてうたわせたダビデの詞とあるので質問したところ

昔、神殿のあった頃には何らかの楽器で伴奏を伴い朗唱したとのことでした。

ヨーロッパの教会ではカソリック、プロテスタントを問わず、聖句を節を伴って朗唱する場面を映画や実際の教会で見聞きしました。

ドイツ、フランクフルトの郊外の古い教会でバッハの教会カンタータを演奏する機会がありました。演奏は日曜日の午後からだったのでメンバーみんな午前中の礼拝に参加しました。その教会では10人くらいの男子（10代～70代）の聖歌隊によって古い聖歌がアカペラで歌われ、古い石作りの教会にまるで天上からの歌声のように響き、何と美しい！と感銘をうけました。また牧師も節をつけて何かを朗唱されていたのを覚えています。

「神々と男たち」という映画では、フランスからアルジェリアに伝道で派遣された修道士たちが日々の祈りを朗唱していましたが、この場面も神への祈りが私にはより聖的に感じました。木戸先生のお話では映画「シンドラーのリスト」でもユダヤ人たちが礼拝の折に、互いに聖句を

節をつけて交唱する場面があったとか、私もこの映画は2、3回見ているのに記憶にありませんでした。もう1度見てみなくては。

音楽がキリスト教に深くかかわっていることは音楽史で明らかです。私の経験した礼拝での音楽は今のところクラシック音楽のジャンルのみですが、アメリカの黒人の教会ではゴスペルが神を賛美する音楽として歌われているし、先日韓国留学生ジョン・ユンジさんに聞いたところでは、韓国の教会ではオルガンだけではなくもっと他の楽器もいろいろ演奏してにぎやかに音楽が礼拝に取り入れられているそうです。そういう礼拝の音楽も一度機会があるなら聞いてみたいと思いました。

ある音楽家は「私は神さまのために音楽の演奏をしている」と言っていました。

私自身はそんな大仰な思いではないですが、神様の賜物をいただいたという思いでこれからも音楽に携わり、その感謝の気持ちを信仰生活に反映できればという気持ちです。



【編集後記】

第17代牧師として、木戸 定牧師をお迎えし、島之内教会だより25号を新たな装いで発行することが出来き感謝です。6月8日には牧師就任式が執り行われ、新しい教会の歩みが始まります。島之内教会に集う群れが良き指導者を与えられたことを感謝し、教会が主の御心にかなう祈りの家となるように、心をひとつにして、神の恵みを喜びほめたたえる信仰生活を送りたいと願っています。引き続き島之内だよりが発行できるように、みなさまからの原稿をお待ちしています。

(河野まり子、和田純子)